学院史編纂室共同研究報告

二〇一九年度の共同研究のテーマは次のとおりである。

研究テーマ	研究員
宣教師研究	○舟木　譲（院長・経済学部） 池田　裕子（学院史編纂室） 神田　健次（顧問・名誉教授） D・H・デルミン（高等部） 村瀬　義史（総合政策学部）
関西学院の戦前・戦中・戦後	○井上　琢智（元経済学部） 岩野　祐介（神学部） 大宮　有博（法学部） 辻　学（広島大学大学院） 橋本　祐樹（神学部） 本郷　亮（経済学部）

（○印・主任研究員）

「宣教師研究」

本共同研究は二〇一六年度よりW・R・ランバス、J・C・C・ニュートン、C・J・L・ベーツ各宣教師（院長）に関する研究を中心として、継続的に実施されている。二〇一九年度に関しては各研究員によって、以下の研究並びに活動が実施された。

舟木主任研究員は、関西学院大学博物館で実施された展覧会「関西学院の一三〇年」（二〇一九年九月二八日～一二月一四日）の図録『関西学院の一三〇年　一八八九～二〇一九』（関西学院大学博物館　二〇一九年九月）に、主として関西学院創立前後から西宮上ケ原キャンパス移転に至る経緯を、各時代に責務を担った宣教師の働きを中心に「祈りと信仰に支えられた一三〇年」と題して寄稿した。また、同窓会関係では関西学院に関する歴史について下記の講演を行った。

1. 関学電業会総会「上ケ原キャンパス移転九〇周年を迎えて―キャンパスが今も語りかけるもの―」（二〇一九年七月二五日）
2. 神戸支部総会「『廃校か否か』の危機から五〇年を迎えて―二〇一九年新たな節目が持つ意味―」（二〇一九

年七月二七日）

3. 西宮支部総会「関西学院が受け継いできた宝の共有―創立一三〇周年・上ケ原キャンパス移転九〇周年を記念して―」（二〇二〇年一月二五日）

神田健次研究員は、『C・J・L・ベーツ宣教師の挑戦と応戦』（R・グルーベル監修、神田健次・池田裕子編、関西学院大学出版会　二〇一九年五月刊行）における日本語（文語）によるベーツ論文の現代語訳と解説を担当した。またこの著書について、関西学院大学出版会の『理』（二〇一九年七月）に紹介した。

さらに、これまでの宣教師研究の成果も反映させながら、左記のような記念講演やメッセージなどを行い、また論文やエッセイを掲載する機会が与えられた。

1. 神戸朝祷会３０００回記念講演（二〇一九年八月二六日）「ミナト神戸の諸宗教とキリスト教」
2. 「阪神・淡路大震災におけるボランティア活動」『関西学院の一三〇年　一八八九～二〇一九』（関西学院大学博物館　二〇一九年九月）
3. 日本ウェスレー・メソジスト学会基調講演（二〇一九年九月九日）『メソディズムとエキュメニズム―W・R・ランバスとC・J・L・ベーツを中心に―』（『ウェスレー・メソジスト学会』二〇号、二〇二〇年三月に掲載）
4. ベーツ宣教師著作の出版記念特別講演（二〇一九年一〇月一四日）「C・J・L・ベーツ宣教師の生涯と思想」（『関西学院史紀要』二六号、二〇二〇年三月）
5. 関西学院大学秋季キリスト教週間（二〇一九年一〇月一七日　三田、一〇月一八日　上ケ原）の特別礼拝メッセージ「Mastery for Service を生きる―ベーツ先生の歩みに学ぶ―」
6. 大学博物館特別講演（二〇一九年一一月三日）「関西学院創立一三〇周年記念を迎えて―学院の礎を築いた人びと―」
7. 法学部チャペル「学院所蔵のキリスト教美術の作品」（二〇一九年一一月一九日）
8. 「関西学院の最初の卒業生」（『関西学院成全会報』二〇一九年一一月）
9. 『新修神戸市史　生活・文化編』（神戸市　二〇二〇年三月）の共同編集者として関わり、関西学院に関する叙述を含む論文も執筆する。

池田裕子研究員は、例年通り、広報誌『KG TODAY』

に次の四本を日本語と英語で執筆した。①「ランバス一家とアメリカ文学」、“The Lambuths and the American Literature”②「最後の祈り」、“Last Prayer”③「テレビ出演」、“C. J. L. Bates on Television”④「『公明正大』とヴァンダビルト大学」、“Fair and Square, and Vanderbilt University”。

『母校通信』には、「関西学院スピリットの生き証人～日米開戦前、ベーツ第四代院長がニューヨークから訴えたこと～」と「関西学院スピリットの生き証人～パリ・オリンピックの石田恒信と河辺満甕～」を執筆した。

このほか、大学博物館制作の図録『関西学院の一三〇年 一八八九～二〇一九』に、コラム「ベーツ院長の原点～故郷ロリニャル村～」を執筆した。『学院史編纂室便り』には、「本ができました！」と「聖路加国際大学に寄贈された日野原重明先生の遺品」を執筆した。

本の出版に関しては、神田研究員と共に編者として関わった『C・J・L・ベーツ宣教師の挑戦と応戦』が五月に関西学院大学出版会から刊行された（担当は、第一部「翻訳」とコラム「幻のベーツ記念館」）。さらに、今年度末刊行の『総合研究カナダ』（水戸考道、大石太郎、大岡栄美編）の「第五章　日本の教育の近代化とカナダの教会～関西学院の事例～」とコラム「ベーツ院長の故郷ロリニャル村」を執筆した。

昨年度に引き続き、「カナダ研究入門A」と「カナダ研究入門B」（いずれも代表：水戸考道法学部教授）の初回の授業で、関西学院とカナダの歴史的関係について講義した。

同窓団体等から依頼を受けておこなった講演は次の三件である。

①「原田の森の奇跡」、原田の森・三日月会、二〇一九年四月二四日、神戸風月堂。

②「『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』の表と裏」、関西学院同窓会東京支部三日月会、二〇一九年一〇月二三日、東京銀座オフィス。

③「関西学院とカナダ、一一〇年」宗教活動委員会教育研究部会、二〇一九年一二月一六日、大学院一号棟。

宣教師の子孫との交流に関しては、今年度秋学期もカナダ研究客員教授として来学されたポール・ウィリアムズさん（D・R・マッケンジーご曾孫）と情報交換を行った。遺品の中から、お祖母様がもっともお好きだったという九谷焼の置物（恵比寿さんと大黒さん）をお持ちになり、ご寄贈くださった（旧院長室にて展示中）。大学博物館には、

版画とD・R・マッケンジーの着物をご寄贈くださった。さらに、三月二四日から二七日まで、アリシア・アンダーウッドさん（J・C・C・ニュートンご来孫）が交換留学で愛知淑徳大学に向かう前に関西学院に立ち寄られ、院長や神学部長を表敬訪問される予定である。

（舟木　譲）

「関西学院の戦前・戦中・戦後」

井上琢智主任研究員は、神崎驥一第五代院長の伝記執筆のための資料収集を今年も継続した。今年度、実地調査はできなかったものの、基本資料である編纂室所蔵の神崎驥一『日記』の翻刻を開始した。翻刻経験のある本学卒業生に委託しての事業であり、すでに一九一九年および二〇年の前半の翻刻を終え、注記を開始している。この時代の『日記』には、神崎驥一が渋沢栄一の招聘によって一時帰国し、渋沢が中心となっている国際連盟協会との関わりや高等商業学部長としての仕事の一端が書かれていて興味深い。なお、本誌本号に掲載している「戦間期関西学院における『恒久平和』運動について―神崎驥一、乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査会、軍事教練―」（下）においてはデジタル版『渋沢栄一伝記資料』を用いた神崎＝渋沢の交流関係を記述しているが、その交流関係を神崎驥一側資料で裏付ける作業でもある。この翻刻事業は長期にわたると考えられるが、順次『関西学院史紀要』に掲載する予定である。

寿岳文章を軸とする関西学院文学部の英文科の教育・研究を「〔研究ノート〕関西学院〔高等学部文科〕の英語教育と研究―寿岳文章をめぐる人びと―」として、一二月一四日、長岡京市中央生涯学習センターで開催されたNPO法人向日庵・公開研究会で報告した。この報告は、「戦間期関西学院における『恒久平和』運動」と同時期に関西学院高等学部文科・文学部で行われていた英文学の教育・研究の実態を明らかにするものであり、双方を明らかにすることで、戦間期の関西学院の社会運動、教育・研究の実態の一端を明らかにできると考えている。

また、NPO法人向日庵講演会（二月二三日、京都キャンパスプラザ）での講演「寿岳文章とウィリアム・ブレイク研究―日常生活の思想家―」（佐藤光東京大学教授院総合文化研究科教授）の記録が『超域　文化科学紀要』（東京大学／駒場、二四）で掲載され、学院史編纂室に保存されている。なお、同法人発行の『向日庵』（三号、二～

三一頁、二〇二〇）にも掲載されている。同誌はこれまでの講演・公開研究会の記録集である。

また、二〇二〇年三月刊行予定の『母校通信』に「向日庵と寿岳文章・しづ夫妻」を投稿した。

岩野祐介研究員は、担当する神学部科目である「日本キリスト教史B」において、明治期～戦後までのキリスト教主義大学について扱う回の中で、訓令十二号とミッション・スクールの対応、関西学院の対応を教えている。また、神学部科目「メソジストの伝統と神学部」では、一九六八～一九七〇年頃の学園闘争期における関西学院、特に神学部の動向について、かなり詳しく年表や復刻資料などを用いながら講義を行っている。

辻学研究員は、一九八〇年代に神学部教授として関西学院に在籍したJames E. Crouch宣教師の活動内容を中心として、当時の神学部、さらに他の各学部が、宣教師にどのような教育上の役割を期待し、また実際に与えていたのかを調査した。調査内容は次年度に文章化して公表する予定である。

（井上琢智）